

P-3-029

看護師のワーク・ライフ・バランスに関する文献検討 - 職場環境改善の支援に着目して -

清水 めぐみ、錦戸 典子
東海大学健康科学部

【目的】看護師のワーク・ライフ・バランス（以下WLB）改善を推進していくにあたり、わが国における近年の研究動向を整理する必要がある。本研究では、特に看護師のWLBを改善するための職場環境改善の支援に関する文献に着目してこれまでの研究成果を整理し、今後の課題についての示唆を得たい。

【方法】医中誌WebおよびJdream2を用い、「看護師&ワーク・ライフ・バランス&原著論文」および「看護師&仕事&両立&（育児OR生活OR家庭）&原著論文」をキーワードとし、2000年から2010年の期間について検索した。（検索時期2010年9月～11月）抽出された文献のうち、職場環境支援に関する文献について、「研究デザイン」、「研究結果より今後必要と考えられる組織・職場のWLBの支援策」、「結果」、「考察」について整理し、研究者の視点を加えて、研究成果と今後の研究課題を検討した。

【結果】「看護師&ワーク・ライフ・バランス&原著論文」、「看護師&仕事&両立&（育児OR生活OR家庭）&原著論文」で検索される文献数61件で、2005年以降徐々に増加し、2008年には急増した。文献のタイトルや要旨を精読し、類似性、相連性に着目して、「職場環境」、「キャリア」、「健康」等、研究内容を12種類に分類した。「職場環境支援」に関する13件の文献についてレビューシートを作成した。調査対象者は、子育て中の看護師を対象にしたものが殆どであった。研究方法については、質的研究が3件、量的研究が10件で、介入研究はなかった。育児期の看護師に対する支援として、個人単位では、職場同僚や管理職の理解やアドバイス、励まし等が必要とされていた。職場単位の支援として、定時就業、子育て支援の重要性を職場に浸透させ、子育て支援制度を利用しやすい環境等、両立支援を進めるための組織文化の醸成度が高い環境づくりが必要とされていた。病院全体の組織的な支援策としては、育児休業復帰プログラムの構築、院内保育所の設置、育児休業期間延長、休職中の給与保証や人員確保等、経営者・人事・事務部門および看護部が連携した病院組織全体での取り組みが必要とされていた。

【考察】看護師のWLBに関して、様々な着眼点から幅広く研究されていたが、介入研究は殆どみられず、今後、WLB支援における介入研究を急ぐ必要があると考えられた。職場の支援として、先行研究では、勤務に関する支援策を利用しやすい職場風土づくりが求められていた。現在、医療従事者を対象とした産業保健活動は十分行われておらず、その推進が課題となっている。今回抽出した文献に記載された「今後必要と考えられる組織・職場のWLBの支援策」としては、産業保健活動に関する内容はなく、医療現場で実質的に働いている産業保健専門職は非常に少ない現状が推察される。産業保健専門職は、看護師長や看護スタッフ個人の相談者となることは勿論、WLBを推進する職場風土醸成のために、WLB推進方法についての情報提供や、職場教育の実践、看護師長がリーダーとなり職場環境改善を推進するための支援等が可能である。今後、看護師のWLBを実現するために、医療現場にも産業看護職等の産業保健専門職の配置が望ましいと考えられる。

P-3-030

電子カルテチェック効率化に向けた視線の動きの分析

中道 上¹⁾、山田 俊哉²⁾、泉 博之³⁾、渋谷 正弘⁴⁾、木浦 幹雄⁵⁾

¹⁾南山大学情報理工学部ソフトウェア工学科、²⁾総合研究大学院大学、³⁾産業医科大学産業生態科学研究所、⁴⁾首都大学東京、⁵⁾キヤノン株式会社

【目的】現在、電子カルテや健診データなどの医療情報データベースの導入が進みつつある。しかし、入力ミスをチェックするためのダブルチェックが欠かせない。例えば、多くの健康機関では、膨大な人数のデータを扱うため、チェックの手間が大きくなる。そのため、チェックしなければならない項目を見逃してしまうスキップ（ヒューマンエラー）が発生してしまう恐れがある。

本研究では、電子カルテの項目チェック時における視線の動きを利用して、ヒューマンエラーの防止策、電子カルテチェックの効率化を検討する。

【方法】電子カルテチェック時の視線を記録するため視線計測装置としてnac社製非接触型アイマークレコーダ EMR-AT VOXER、Web利用時の操作と視線の動きを同期して記録可能なITR-Recorderを利用した。また視線の分析には複数名の視線の軌跡を表示可能なITR-Playerを利用した。

【結果】電子カルテをチェックする2名の視線の軌跡を重ねて可視化した図を示す。2名の視線の軌跡から、チェック担当者ごとにチェックしている箇所が異なることが確認できた。また、視線の軌跡が表示されない箇所では、スキップ発生の危険性がある。

【考察】ヒューマンエラーの防止策として、チェックすべき項目の上に視線の軌跡がない場合には、エラーとして検出し、警告を出すといった方策が考えられる。また、スキップによるヒューマンエラーの危険性が回避されるため、作業者のメンタルワークロードの低減につながる。

【参考資料】Noboru Nakamichi, Mikio Kiura, Toshiya Yamada, Hidetake Uwano " Collaborative Visualization of Web Interactions for Usability Testing " *Proceedings of the 9th Pan-Pacific Conference on Ergonomics (PPCOE2010) CD-ROM*, Nov. 2010.

